

## 第7話：アビイちゃん、大人への一歩

その日も、いつものように訪れた"トントンタイム"。

アビイちゃんは、私のそばで甘えん坊になる大切な時間。

でも、その平穏に割り込んできたのは、自由な風——ビオラちゃん。

ゴロンと横たわり、空気を読むことなく、中央にどっしり。

アビイちゃんは、ひとつ息をのみ、そっと距離をとった。

……が、しばらくして、また戻ってくる。

また離れ、また戻ってくる。

そして、ついに——

アビイちゃんは、ビオラちゃんの首筋を、そっと、なめた。

その瞬間、時間がやわらかくほどけた気がした。

ビオラちゃんはさらに大胆になる。ころんと横たわったまま、

短い足で、香箱アビイちゃんのお尻に「ちょん」。

もう一度、「ちょん」。

アビイちゃんは、ぐっところえる。

「うー……うー……」と、低く、甘えたような、怒ったような、なんとも言えぬ声をあげながらも、

香箱を崩さず、じっと耐えていた。

私はその間、アビイちゃんのしっぽを「よしよし」、

ビオラちゃんの足も「よしよし」。

アビイちゃんのしっぽは、ぶるんぶるんと細かく震えていたけれど——

ふと立ち上がり、そっと離れた。

でも、それで終わらないのがアビイちゃん。

しばらくして、また戻ってきて、今度は――

ビオラちゃんの首筋を、ペろりとひと舐め。

なんということ。

静かな葛藤と優しさの末にたどり着いた、大人の一步。

ああ、アビイちゃん。

きみは今日、ほんとうにえらかったよ。